讀賣新聞
◆ (23) 地域 名古屋圏 13版 2007年(平成19年) 1月3日 (水曜日)

断絶 吹っ飛ばせ

おおぐちおやじの会

こども それは未来 ■■2

「ソラッ」「エイッ」。威勢のいいかけ声とともに会場を沸かせる中学生らの鳴子踊り。親たちは見事なハーモニーの合唱やハンドベル演奏で観衆を魅了した。大口町の町民会館で12月24日に開かれた町を挙げての「第5回ダンス&ミュージックフェスティバル」。主催は「親子の断絶を父親パワーで吹き飛ばしてやろう」とできた「おおぐちおやじの会」。活動は今、着々と実を結び始めている。

フェスティバル出演の子どもたちの緊張をほぐすメンバー

安全パト、料理教室、フェスタ……

広がる対話の舞台

会は2001年4月、会長の田中聖章さん(52)の呼びかけで結成された。田中さんは、中学、高校のPTA役員を経験。子が親に刃物を向け、親が子を虐待する事件が相次ぐ中、「心の通い合いがないのが原因。父親が子どもに背を向けていることに問題がある」と考えるようになった。

かつてのPTA仲間の男性10人に、「おやじの会をつくろう」「父親が頑張る姿を見せたい」と訴え、「お前が言うならやってみよう」と旗揚げした。

学校の駐車場にラインを引く作業を買って出た。登下校時の安全パトロール、五条川で遊ぶ自然塾、父子料理教室、木工体験などへと活動を広げた。ダンス&ミュージックフェスティバルは、町民が楽しみにするイベントに育った。「子どもみんなの親代わりはできないが、ふれあう場は提供できる。きずなが深まれば、親も『先生は授業に専念して』と胸を張って言える」と〈おやじたち〉は確信する。

大勢の中学生が舞台の裏方としても参加し、手伝った。いずれも1年生の竹沢亮斗君(13)、瀬合勇樹君(13)、井上唯さん(13)は「手伝うのは初めて。大人と一緒なのも結構楽しいよ」と舞台のそでで声をそろえた。

会員は現在、40歳代前半から60歳過ぎまでの37人。会社員、中学教師、会社社長、薬剤師、自営業者など様々だ。看板に反し、女性も4人加わっている。

江口かおりさん(43)もその一人で、幼児教室を主宰し、子どもとのつながりは深い。「無表情の子が増えたと感じる一方で、どう対応したらいいのか悩む親も多い中、会の父親たちが積極的にかかわろうとしているところがすごい」と評価し、応援する。

フェスティバルには500人以上の町民が訪れた。最高潮に達したころ、中学2年生の稲垣友紀子さん(14)らが出演する鳴子踊りを見守る父親の正美さん(43)は、「共通の体験を通して親子に会話が生まれ、友だちのような感覚を持てるようになった」とうれしそうに語った。

「反省するようなことは初めからやるなと、前だけを見て走ってきた」と田中さん。「会員を50人に増やしてパワーアップ。親子交流のメニューをさらに充実したい」と目を輝かせた。

(加藤真澄)

イベントの舞台のそでからステージを見守る